View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

公共空間概念のメディア論的分析ー理想とその実現のパラドクスー

Media Theoretical Analysis of the Concept of the Public Sphere

田　辺　　龍
TANABE Ryo

1．はじめに

インターネットを利用していると誰もが気付くだろうが、そこには膨大な数の「自分語り」が存在する。その多くは自己紹介系ウェブページだが、典型的な構成としてはまず自身のプロフィールがあり、日記があり、旅行記からプリクラを載せただけのものまでさまざまな作成者あるいはその仲間達との写真があり、そしてBBS（電子掲示板）やメールといった閲覧者との交流手段がある。同型のものとしては、家族紹介ホームページも多数存在する。誰にとっても情報の発信が容易になった結果の一面が、こうしたきわめてパーソナルな情報の氾濫となっている。周知のように、パソコン誕生の文化的背景には1960年代後半のアメリカにおける反体制文化の影響が濃厚である。きわめて高価なために大企業や官庁でしか所有しえず、また一部の専門家しか操作できないメインフレームと呼ばれる大型汎用コンピュータの理念に対抗するため、安価で誰にでも操作可能なコンピュータの普及を目指したわけである（西垣2001：22-27）。そのためかインターネットの普及以前には、ネットワークの普及によって地位や性別といった社会的情報に影響されることのない、真に自由かつ民主的な討論の空間が成立すると期待されていた。あるいは現在でも期待されているかもしれないが、こうした素朴な技術決定論的思考は「自分語り」の氾濫のような現実によって裏切られている。さらに、出会い系サイトをめぐる事件や匿名掲示板への犯罪予告の書き込み、ネットを悪用した詐欺事件等々が報道されるに及んで、今や一般にはインターネットはとるに足らぬ情報に満ちた無秩序で信頼できない空間というイメージが優勢ではないだろうか。こうした状況において一方では、インターネット空間におけるコミュニケーション構造とその実践に着目してその公共空間としての可能性を考察する興味深い論考があり（たとえば筒井・秋吉2001、吉田2000）、主としてハーバーマスが提示した公共圏の実現可能性が問われている。ここから類推すると、たとえば著作権問題のように既存の法律をインターネットに適用したり、ネット・オークションのように本人確認を徹底させ、さらに評価システムを導入して信頼性の向上に努めたりなど種々の策が講じられている。こうした実践はインターネット空間の公共性を高めていく営みであると言えるかもしれない。その一方で、場合によってはこうした公共性の阻害要因であるものも含むかもしれないインターネット上の共同体的側面については、パソコン通信（成田1993）の普及期を嚆矢として、ＭＵＤにおけるアイデンティティの拡散（Turkle 1995=1998）やニュースフォーラムにおけるアイデンティティの偽装、およびフォーラム荒らし（Donath 1998）から、近年のウェブ日記（川浦編2000）や２ちゃんねるに代表される匿名掲示板（『広告』2000年9・10月号）まで、CMC（Computer-Mediated Communication）のエスノグラフィーの蓄積がある。

このようにインターネット空間は極めて柔軟であり、この場に以後どのようなコミュニケーション形態が登場するのかを予測することさえ容易ではないほどに急速に変貌してしまう可能性すらあるが、差し当たって本論の主要な関心はインターネット空間における共同体的側面にある。とりわけ、パソコン通信に関する成田康昭の研究に述べられているように、メディアと人間の結合により認知的な複合空間として形成される「メディア空間」が、社会的な関係を含む種々の日常生活の要素が複合する「生活空間」の中に出現するとき、行為主体がそのメディア利用の実践によって当該メディアをどのように構造化するか（成田 1993：140-141）を記述することによって、インターネットの社会的意味と機能の一端を明らかにすることにある。先述のようにインターネットには公共空間としての可能性が考えられると同時に、極めて私的な内容ですら容易に発信可能であり、つまり公共空間に容易に私的なものが浸出してきているのである。そこで次節ではいくつかの公共性をめぐる議論を概観して、メディア論による空間変容をめぐる議論との対応関係を見ていくことにする。そしてそもそも公共空間なる概念にはいかなる含意をもつものなのかを検討したい。また方法論上の問題として、吉田純の指摘するモダン・アプローチとポストモダン・アプローチについても触れておかねばならない。吉田によれば、「モダン・アプローチは、メディアをあくまで人間のコミュニケーションにとっての手段ないし環境として位置づけるという意味でコミュニケーション論的方法を基本とするのに対し、ポストモダン・アプローチは、メディアを独立変数としコミュニケーションを従属変数とするという意味でメディア論的方法を基本としている」（吉田 2000：116）のであるが、メディア空間に固有のコミュニケーションを対象とする本論は後者のメディア論的方法をおもに用いている。しかしこの二つの方法論は相互排他的であるよりは、相互補完的に捉えていくことが有効である（Ibid.：120）ことは言うまでもない。なお本論では基本的に public sphere を公共空間として、ハーバーマスの議論に関連する場合は慣例によって公共圏としている。

2．メディア空間と公共空間のアナロジー

ここではまず、公共空間とはどのようにして構築されるかということを考えてみよう。花田達朗によれば、ある空間にパブリックなる形容詞を被せることが出来るためには、「言説の公開性」と「異なった他者との共同性」という二つの原理によってその空間が構築されていることが必要である。言説の公開性とは、コミュニケーションの自由とコミュニケーション能力の存在があって初めて可能となる行為規範であり、異なった他者との共同性とは、連帯と寛容を旨とする他者との関係構築における作法ないしは行為のモラルである（花田 1999：27）。こうした公共性概念の淵源は、アレントによれば、古代ギリシアのポリスにおける政治活動に求められる（Arendt 1958=1994：46-54）。ポリスの政治活動においては空間的にはアゴラに多様な参加者が集い、そのメンバーは市民権を持つ成人男子に限定されてはいたが、そこでは平等な資格で全成員の討論によって政治的な決定を下すことが可能であった。このように公共空間の第一義とは、見知らぬ人同士が出会い、コミュニケーションを行う可能性がある空間ということである。もちろんこの意味での公共空間は街路や公園といった物理的空間にもインターネット空間にも存在するのであるが、ここではいわゆる現実空間に限定して論を進める。ポリスは言うまでもなく、街路や公園、劇場、パーティー等々の公共空間の特質とは、物理的には限定された空間であり、その中で人々は対面状況にあるということである。ポリスに典型的なこうした空間構成をとる公共空間を、ここでは「共同体モデル」とよんでおこう。この共同体とは限定された空間であり、そのメンバーが他者とは言ってもほぼ顔見知りであるような規模を想定している。またアレントに従って公共空間の淵源をポリスに求めるとす

るならば、先の公共空間の成立要件としての「言説の公開性」には、全成員の参加という理想が含まれるだろう。そして重要なことは、ポリス・村・劇場等々と、公共空間とはあくまでもその空間を一体のものとして把握することにある。つまり、公共空間とは原義からしてつねに「単一の」公共空間なのであり、恐らくはこのモデルが現代に至るまで公共空間の理想として西欧文化の中に存在しているのだろう。公共空間の理想は、全成員参加の下に「言説の公開性」と「異なった他者との共同性」が構築された「単一の」＝限定的な空間なのである。しかし、潜在的には人間の生活圏全体の拡大によって、顕在的にはこの「単一の」空間という構成を変容させるメディアの登場によって、「共同体モデル」の公共空間は大きく変容することになるだろう。

古代から中世を通じて各共同体は空間的に、したがってまた文化的にも孤立していたのであるが、これは都市化によって大きく変容し、それにともなって公共空間への意識が高まる。セネットによれば、公共性に対する意識は18世紀初めのパリやロンドンで拡大した。この時期ブルジョア階級の住む都市は社会の広く異なるグループが出会う世界になりつつあり、「パブリック」なる語が現在使われるような意味をとるようになったときには、こうした都市化に伴う多様で複雑な社会グループの不可避的接触をもその内に含んでいたのである（Sennett 1974=1991：34-35）。都市の雑踏はかつてない異質性・多様性を感じさせたのであろう。この段階に至り、理念型としての単一の公共空間＝共同体モデルは攪乱される。都市化以前には、人間の言葉は市町村単位ですらアクセントが異なるというように、非常に多様であった。これが攪乱される都市化の時代に、文化を均していったのは周知のように出版資本主義の勃興とそれによる「想像の共同体」としての国民国家であった（Anderson 1991=1997）。たとえば毎朝同じ新聞を読むという経験によって、自分と面識のある人たちを超えた広い範囲で、同じ新聞の読者を想像し、その共感によって「異なった他者との共同性」が構築されるのである。

都市化の時代に意識され始めた公共空間が、この時代の新しいメディアとのアナロジーに基く可能性については、同時代人である哲学者キルケゴールの証言を見てみよう。キルケゴールによれば、情熱の時代であった革命時代に対して、近代は無感動な反省の時代である。近代人は革命時代に比して理性的にはなったが、そのかわり主体的に行動するということをせず、つねに傍観者の位置にいるとする。この時代の特徴である「水平化」は、「人間平等」の名のもとに優秀なものを引きおろして低い水準で同等意識を持つことに努める心情であり、これは人間を数学的な量に還元してしまう「公共」という巨大な抽象性の支配に裏打ちされている。キルケゴールの見る公共性概念は「いっさいを包括するがその実は無であるところの何ものか」であり幻に過ぎないが、これを発展させたのはそれ自体が一つの抽象性となるときの「印刷物（プレス）」の助けである[i]という（Kierkegaard, 1846=1975：214-229）。さらに、こうした公共性概念は古代にはまったく発生しえなかったとしている。というのは、「古代には民衆みずからが en masse in corpore〔一体となった集団で〕行動の場にあらわれ、仲間のうちの単独の者がおこなったことに対しても責任を負わねばならず、他面、単独の者もこのような性格のものとして身をもって居合わせ」るような、「強力な共同生活がその具体性を充実させることがもはやなくなったときに初めて、印刷物がこの公共という抽象性を作り出す」（Ibid.：229）からである。つまりここでは公共性概念が「古代にはまったく発生しえなかった」のではなく、古代ギリシアのポリスを想起させる表現からみても、近代においてその概念の内容が変わったことを言っていると考える。こうした批判は「単独者」を強調する哲学者として当然であろうし、また現在でも重要な示唆を含んでいるが、先述のように公共空間に「単一の」という意味が込められていると考えれば、同時代の都市

化の規模に対応する「単一の」公共空間はやはり出版資本主義なくして成立しえなかったと思われる。「想像の」なる形容詞がつくものではあっても、印刷物は「異なった他者との共同性」の構築に寄与しただろう。一方で、もうひとつの公共空間の必要条件たる「言説の公開性」は、ポリスを範にするならば都市化の規模に対応するアゴラとはそもそも非現実的であり、「共同体モデル」からは大きく変容せざるをえないことになる。

初期のマスメディアである出版メディアによって成立した公共空間は、「想像の共同体」として「異なった他者との共同性」を構築した。一方この空間における「言説の公開性」は制度的には言論の自由というかたちで、この時代の支配階級となるブルジョア階級の公権力に対する闘争の結果、樹立された。しかしながら、物理的な空間の制約を超えた広範囲を包括するこの空間において成員が一堂に会してコミュニケーションを行うことは不可能であり、言論の自由を行使してこの空間において語ることができるのは特定の成員に限定されることになる。それはまず産業としての出版メディアへのアクセス可能性を有していることであり、またこのメディアに対するより高いリテラシー身につけていることである。メイロウィッツによれば、まず読み書き能力の習得には数年を要するという事実は、印刷物へのアクセスに対して二つの仕方で影響を与える。ひとつは、読み書きによるコミュニケーションは要求されるアクセス・コードを知っている人々に自動的に制限されるということである。そしてもうひとつは、そうした人々の間でさえ、メッセージはその複雑さに応じて異なる集団に送られることである。したがって、幼少年や読み書きのできない者は、すべての印刷物によるコミュニケーションから排除され、社会はさらに多くの読み書き能力のレベルによって分離された情報システム[ii]へと分割されることになる（Meyrowitz, 1985：75）。こうしてこの時代の出版メディアによる公共空間は、富裕でありかつ高い教養を身につけたブルジョア階級によって担われることになる。先述のキルケゴールにより個人の具体性を欠いた幻であるとされた公共性概念批判を「公共とはそもそも誰なのだ」と言い換えるならば、それはブルジョア階級にとっての公共性なのだ。これがハーバーマスによるブルジョア階級の「代表具現的公共圏」（Habermas 1990=1994）であり、メディア論的にはそれは印刷物へのアクセス可能性の制限によって成立したことが分かる。

マスメディアの登場は、以上のように、物理的な空間の制約を超えた公共空間を成立させ、そこでは広範囲にわたる「異なった他者との共同性」を保持しえた。しかし「言説の公開性」は、情報の発信／受信の非対称性という技術的な制約とそれへのアクセス可能性、さらに高いリテラシーの有無という社会的な制約とにより当該空間への参入が制限されるというかたちで、間接的に変容を被ることとなった。このことは翻って「異なった他者との共同性」なるイメージへも影響を与えずにはいないだろう。この場合の異なった他者とは「ブルジョア階級内の」という限定が付されるかもしれない。端的にこの段階に至って、公共空間は古代の理想からは乖離せざるをえなくなったのであり、とりわけ公共空間への参入が間接的にではあれ制限されたことは注目に値する。アレント（Arendt 1958=1994：59-74）に依拠しながらハーバーマスが述べている（Habermas 1990=1994：31）ように、古代の市民的公共圏に対する近代の公共圏の特性とは、私的領域と公的領域の間に「社会的領域」が成立したことであり、これが「市民社会」という公共的意義を帯びてきた私有圏[iii]にほかならない。ここで先に触れたブルジョア階級の言論の自由をめぐる公権力との闘争を併せ考えるならば、この段階のマスメディア的公共空間への参入の制限によって、ブルジョア階級はみずからの私的な利害を公共性を帯びた問題として提示できたということになる。つまり公的領域とみずからの私有圏を一致させたのである。このアレント＝ハーバーマスによる近代の公共空間の三層

構造モデルは、都市化の時代以降の多様な集団が混在する社会においては、もはや古代の公共空間の牧歌的な理想は存在せず、公共空間は特定の集団―特殊な場合は特定の個人―にとっての私的な領域の侵入を避けえないということを示唆しているだろう。端的に言って、多様性と「単一の」公共空間は一致しがたいのであり、その結果としての三層構造なのである。したがって、しばしば指摘される「公共性の喪失」とは、古代的な共同体の生活が崩壊した段階において萌していたと考えられる。多様な社会においては、各人はその個人的な領域と公的な領域になんらかの一致を見出せないかぎり、「異なった他者との共同性」を感じ取れなくなっていたのである。セネットによれば、われわれが社会そのものを「意味ある」ものと見るのは、社会を一つの大きな心的な組織に変えることによってのみである。たとえば、政治家の仕事は法律の立案と実施だと理解していても、政治の争いのなかに個性の活動が認められなければ、その仕事に関心を持ったりしない。ここでは政治家は、採り上げる活動や公約ではなく、どんな人間であるかという点から「信頼できる」とか「正統派」だと語られる。この心理的な想像力こそが社会についての親密なヴィジョンであり、この場合の「親密」とは、温かさ、信頼、および率直な感情表現を含みに持つ。われわれは経験のあらゆる領域でこうした心理的な恩恵を期待するようになるが、意味ある社会生活の多くがこうした心理的な期待に報いることが出来なくなったため、外の世界あるいは非個人的な世界はわれわれの期待を裏切る空虚なもののように思えるのだとする。こうして人々は、非個人的な意味のコードによってのみ適切に扱える公的な事柄を、個人的な感情によって処理しようとしているのである（Sennett 1974=1991：17-18）。このセネットの議論に準拠して、本論ではアレント＝ハーバーマスの三層構造[iv]は、特定の集団あるいは個人の私的領域を公的な領域と一致させる闘争として捉える。つまり基本的には公／私という問題構成をみていくことにする。初期近代の公共空間＝ブルジョア階級の公共空間の安定は、そこにいかに多くの人が私的なヴィジョンとの繋がりを、つまり「親密性」を感じ取り「異なった他者との共同性」を維持しうるかにかかっていたと言えよう。しかし、セネットの指摘にもあるように、「外の世界あるいは非個人的な世界はわれわれの期待を裏切る空虚なもののように思える」ようになったとすれば、それはこの公共空間から排除されているという感覚が醸成されたことを意味する。これは先に指摘したように、出版メディアとリテラシーの関係からも推測される。セネットはメディアについてはあまり論じていないが、公共空間のよそよそしさは新たなメディアによって親密性の側にシフトするだろう。これはまた別の側面から大衆化社会として論じられているような事態である。

3．電子メディアによる公共空間の変容

初期近代の公共空間はブルジョア階級の公共空間であった。これはもちろん一面的に批判されるようなことではなく、近代社会の成立とその後の安定に寄与したことは疑いえないが、こうした代表具現的公共圏の安定に寄与していた要因のひとつが出版メディアの構造にあると考えるならば、新たな構造をもたらすメディアすなわち電子メディアの登場によって、公共空間への参入可能性が変容するに至って動揺し始めることになる。もとよりメディア空間は広大な空間を「単一の」公共空間として想像させることにより、一面で古代の公共空間の理想を代捕していたと考えられるが、その代償として技術的・社会的制約による参入条件の制限をともなっていたことは先述した。この制限が徐々にではあれ緩和されていくことは、古代の公共空間の理想により接近していくかといえば、現実はそのようにはならなかった。電子メディアの普及以降は、「単一の」公共空間という理想からの乖離は誰の目にも明らかになる。

メディア空間の存在が社会生活に占める位置がますます大きく無視しえなくなるのは、電子メ

ディア以降である。それ以前においては、出版メディアが国民国家の表象を可能にしたとしても、そのような想像上の「単一の」空間とは別に、現実空間における諸々の場所の単一性は基本的に保持されていた。つまり人々の具体的な社会生活の場にメディア空間が侵入して決定的な影響を及ぼすということはまず考えられなかった。食事中に本を読んでいれば注意されるという程度であっただろう。しかし、電子メディアは容易に空間の単一性を分節化するばかりではなく、それ以前であれば分離していた空間を融合させる。たとえばテレビは、多くの私的な場がなお存在するにもかかわらず、かつては分離していた多くの社会的な領域を重ね合わせるのだ。メイロウィッツによれば、対面的な会話や本に比して、テレビやラジオは大人たちが「かれらの間で」だけコミュニケートすることを困難にしてしまう。それはしばしば子供たちに「盗み聞き」されてしまう。こうした事態は、テレビが茶の間に鎮座していた時代を経てすでにパーソナル・メディア化した現状では、さらに説得力を増しているだろう。同様に電子メディアは、男性および女性にとって、相手の性の社会的パフォーマンスについての知識を相互に高めることになる。このようにして、電子メディアによって公／私だけでなく、種々の社会的状況の分離は融合され混交することになる。政治家にとって、特別なことを特定の有権者にだけ伝えたり、異なる社会的状況に応じて異なるふるまいをしたりすることは困難になるだろう。これらのことが示唆するのは、こうした社会的な場やパフォーマンスの再構築が、子供と大人あるいは男性と女性の境界が曖昧になり、政治的英雄が平均的市民のレベルにまで低下するという昨今の社会的な流れを説明する少なくとも一部の要因であるということである（Meyrowitz 1985：5）。こうして、電子メディアの普及によってもはや空間を場所性によって定義することは不充分となり、「情報システム」（information-system）というより包括的な概念に目配りする必要が生じるのである（註ii参照）が、出版メディアはメイロウィッツによればむしろ状況の分離を特徴としていた。人々を異なる状況へと分離することは、異なる世界の見方を促進し、そして相互的であるよりも相補的な役割を演じることを許容した。こうした状況の区別は、読み書き能力と印刷物の普及により支えられていたのである。それは、異なるレベルの読む技術とその訓練、異なる文学への興味に基づく大きく異なる情報世界へと人々を分離する傾向にあった。これらの区別はまた、異なる場所に人々が孤立していたことにもよっており、与えられた場所において可能な特定の、限定された経験に基づき異なる社会的アイデンティティを醸成させた[v]のである（Ibid.：5-6）。このことから、テレビによる状況の融合という事態を促進した要因として、出版メディアと同様にリテラシーの問題が重要であることが分かる。つまりテレビの視聴においては、複雑なコードはほとんど存在しない。テレビのシークエンスと日常の対面的相互行為の構造には強い関係があり、読み書き能力の習得に比して、テレビの理解は単純であるのだ（Ibid. : 75）。テレビは出版メディアに比して、リテラシーの閾を低くしたのである。

テレビがあらゆるものを等価値にして社会を均質化する機能、すなわち「民主化」「脱神話化」の機能を評価すべきであり（桜井　1994）、それは本論において出版メディアによって構築された公共空間として捉えた市民的公共圏が、その制約ゆえに完全には実現できなかったより多くの成員の参入を容易にしたからでもある。しかしその結果理想的な討議の空間が構築されたわけではなく、リテラシーの閾の低下によって出版メディアをも巻き込んで商業化が進行し、売上にしても視聴率にしてもより多くの人に受容されることが最重要の課題となった。その結果公的な問題は私的な興味に引き付けて理解されるようになり、同時に私的な問題が公的な領域に侵入するという、セネットのいう「親密性の専制」（Sennett 1974=1991）という公／私の枠組の不分明化を出来した。こうし

た事態への批判として、具体例としてテレビ・バッシングを考えるならば、興味深いことが分かる。たとえば娯楽性の重視に対して政治問題の重要性を強調したり、政治のワイドショー化を批判したりする場合、その背後に重要なことは多数者には理解されないというエリート主義的な価値観が紛れ込んでいるのである。この正否は簡単には断言できないが、ともあれ「親密性の専制」段階に至って、公共空間の構築にはより多くの成員の参入が重要なのではなく、かつての市民的公共圏におけるように選ばれた成員による限定された公共空間が理想として想定されたのである。それでもまだ、ここで言及したテレビに代表されるマスメディアは、種々の方法で読者・視聴者の意見のフィードバックを試みてはいるが、やはり情報の発信／受信の非対称性は存在している。そのかぎりで、「親密性の専制」とは言っても、成員の参入は受動的なレベルにとどまっていた。それでもひとつは空間を容易に多層化するという技術の特性によって、もうひとつはリテラシーの閾の低下による公／私の枠組の崩壊によって、電子メディアの構築する空間は「単一の」公共空間なる理想とは馴染みにくいことが分かる。そしてこの傾向は、情報の発信が格段に容易になるインターネットの普及によってより加速されるだろう。この事態に対応するかのように、たとえばハイビジョン・テレビの特性としてテレビと視聴者の双方向性が喧伝された。だがむしろインターネット時代においては、マスメディアはこうした発信特性に依拠して代表具現的な、情報の信頼性を担保するという役割を果たすという方向性が一方では考えられる。匿名掲示板のニュース速報よりは、既存の報道機関のサイトによって提供される情報のほうが当然信憑性は高いだろう。しかし、電子メディアは空間を多層化する以上それは「単一の」公共空間ではなく、その他諸々の空間と並存する飛び地のような存在であるだろう。そしてその間のフィードバック関係において情報の信頼性を確保すること、この以前からの課題がマスメディアの意義でありつづけるだろう。

4. オンライン・コミュニティ―技術と社会の相互作用―

電子メディアの構築する空間は、もはや「単一の」公共空間なる概念とは馴染まない。空間を多層化する作用により諸空間を飛び地状に存在させる以上、その諸空間はある意味で古代の理想に近く限定的な空間となるだろう。その典型がいわゆるオンライン・コミュニティであるが、それは単純にインターネットという技術が普及した結果生じてきたわけではない。先にテレビや雑誌はその発信／受信構造の非対称性にもかかわらず、読者・視聴者の意見のフィードバックに努めてきたことを述べた。これがインターネットの時代、その「自分語り」の氾濫を準備した側面がある。アットニフティ心理学フォーラム・マネージャーである黒岩雅彦が指摘しているように、雑誌の読者投稿欄に象徴されるように、インターネット普及以前から自分が思ったことを公開したい、あるいは他者が公開したものを読みたいというニーズは存在していたと考えられる。たとえば日記は本来パーソナルなものであるが、作家のような一部の人は作品として公開を前提とする日記を作成する場合はあった。この限られた人によるものであった公開を前提とする日記が、インターネットによって一般の人々にも可能になったのである（川浦編 2000：181-183）。ところが、有名人、すなわちある意味で公人でもある作家たちと異なり、一般の人々の日記はほぼきわめてパーソナルなものとならざるをえない。しかし、こうしたウェブ日記では、掲示板やメールを用いて読者と書き手との交流が容易であるため、その書き手を中心としたコミュニティ的な集団が形成される。ここで注意すべきはその集団が観察者の視点からはいかに取るに足らぬコミュニケーションを行っていると見えようとも、参加者にとっては自由に発言が可能な限定された空間として感じられているだろうことである。この意味でオンライン・コ

ミュニティとは適切な比喩であるが、それではなぜこうした情報発信が行われ、また小集団におけるコミュニケーションが求められるのであろうか。このコミュニティは古代の共同体のように比較的孤立しているわけではなく、インターネット上では基本的に誰に対しても開かれている。さらにインターネットというメディア空間上に存在するのであるから、現実空間との関係も問題にしなければならない。それらの諸関係の中に「なぜオンライン・コミュニティなのか」の鍵があるだろう。

ここではかつて拙論で指摘した（田辺　2001）ように、メディア空間と現実空間とを仮想／現実という二分法で捉えるのではなく、「場」としての連続性をもとに考えてみたい。

ここで「場」とはそれ固有の規則を持つ空間であり、この規則によってその空間内でのコミュニケーションを秩序づけているのである。きわめて単純化した説明をすると、その規則は現実空間においては年齢や地位等の社会的情報によって担われ、たとえば内面や意図の発現を野放図に拡大するということは制限されるわけである。ゴフマンが膨大な例をあげて説明している（Goffman 1959 =1974）ように、現実空間においてもすべての成員が対等な資格で討論するというコミュニケーションの理想は制限されているのである。一方メディア空間においては、そうした社会的情報に依拠してその場を支配することは制限されるが、反面で個人の内面や意図の発現はある程度自由になるだろう。このように規則を有する空間を「場」として捉えると、コミュニケーションの構造がその「場」によってある程度規定されること、またコミュニケーションの実践によってその場における種々の規則が生成・解体するだろうことが考えられる。したがって対面状況とCMCとの規則の相違は、双方にとって利点であり欠点であることが分かる。こうしてCMCにおいては技術的にはこの空間構成の特性を利して好き勝手なことを発信するようになるだろうと予想されるし、実際その通りになっている側面は否定できない。しかし事態はそう一面的ではなく、たとえば絵文字を用いて書き言葉を対面状況のコミュニケーションに近づけていく試みのように、新たな規則を生成していこうとする場合もある。つまり、空間構成の特性を利するにしても、それを改変するにしても、いずれの場合もそれはインターネット空間に集う人々の、そこでのコミュニケーション実践であることに変わりはないのだ。オンライン・コミュニティの叢生もその結果のひとつなのである。よってすでに多くの論者に指摘されている（代表的なものとしてはPoster 1990=2001）ことだが、空間構成の特性を利するという側面もまた一概には否定できない。たとえばネット上で本名を明かさずに偽名を用いることは、プライバシーの保護という側面から擁護されうる。インターネットでは、書き手が自分の送信内容を誰が読んでいるかを知ることができない。うつ病の体験を語ることや、性的虐待の被害者の集まるフォーラム等非常に個人的な事実を打ち明ける場合や、合法性の疑わしい事柄を議論する場合、匿名使用の可能なメールアドレスを使用する方がプライバシーの保護に当然益するだろう（Donath 1998：53）。現実空間とそこでの人間関係においては、こうした議論は差別や偏見等による不利益を被る可能性が高く、インターネット空間のような匿名性の高い空間の方が議論に適しているのである。またコミュニケーションにおいて種々の社会的情報の重要度は低下せざるをえないために、そこにより大きな自由、すなわち話しやすさや気安さといったようなコミュニケーションに対する敷居が低いと感じるかもしれない。柔軟なインターネット空間はカスタマイズが容易であるにもかかわらずこうした不確実性が容認されていること、これもインターネット空間における利用者のコミュニケーション実践の結果なのである。ここからオンライン・コミュニティには自由な議論の場としてばかりではなく、現実空間の規則による桎梏からの解放、すなわち一面では現実空間の不備を代捕して

いると言えるだろう。さらに重要なことは、ドナスによれば、偽名であること（pseudonimity）と純粋な匿名性（pure anonymity）を区別することである。偽名は、現実世界の人物と対応しないかもしれないが、ヴァーチャルな領域において確固不動の名声を得るかもしれない。偽名のメッセージであっても、受信者にとって送り手に関する手がかりとなる情報が豊富である場合があり、こうした手がかりにしたがって一貫した人物像が形成され、それが信頼を得てコミュニティの形成に至るようなことは既に珍しいことではないのである。匿名性が高いとされるネットの世界にあっても、テクストの中にゴフマンのいう「非意図的表出」（expression given off）を見て取ることがまったくできないわけではなく、この意味で純粋に匿名的ではないのである（Donath 1998:38, 53）。ヴァーチャルな領域に名声が確立されることからも分かるように、メディア空間は現実／仮想という二分法の下に軽視する段階を超えるほどに既に普及かつ定着しており、現実空間と比肩しうるひとつの場を形成しているとするべきであろう。とりわけインターネット空間は公的な議論の場も存在する一方、無数の私的な小集団も存在するように、多様なコミュニケーションを行いうる空間である。ここに「単一の」公共空間なる概念は成り立ちがたいにしても、情報インフラさえ整備されていれば誰でも自由に参入しうるという点で、間違いなく公共空間のひとつの理想を実現しているのである。にもかかわらず、その帰結としての小集団の飛び地的な並存が公共空間とは程遠いとされるのならば、それは恐らく公共空間の理想が古代の比較的均質な共同体の生活のイメージと分かちがたいからではないだろうか。公共空間とは誰もが自由に参加して発言することが可能であり、かつ多様性の容認される場であるとすればインターネット空間は、現実空間との関係で制限が付されるにしても、それに最も近い条件を備えているだろう。

5. ま と め

以上のように本論ではメディア論のおもに空間変容に関係する議論を用いて、その視点から公共空間なる概念を整理することを試みてきた。公共空間の成立要件である「言説の公開性」と「異なった他者との共同性」は、ポリスを範とする公共空間の「共同体モデル」においてのみ幸福な一致をみることができた。その「共同体モデル」の公共空間が近代の「代表具現的」公共空間へと決定的に変容していく背景には、人間のコミュニケーション空間の拡大が存在しており、同時期の出版資本主義の勃興は「想像の共同体」として広範な空間をカバーすることを可能にした。しかし広範な空間をカバーした代償として、この空間においては「言説の公開性」の前提となる多くの成員の参加が、技術的・社会的制約により制限されることになった。こうして、この段階ですでにブルジョア階級の私的利害が公共空間に侵入してきており、その傾向はテレビ以降の電子メディアによるリテラシーの制約からの解放によって加速され、種々の集団による私的利害の公共空間への侵入＝「親密性の専制」という事態をもたらした。より多くの成員が公共空間に参入するという理想の実現が逆説的な結果をもたらしたのである。電子メディアが空間の構成を多層化させリテラシーの閾を低下させたことは、公共空間概念に決定的な変容を迫るものであったと考えられる。少なくとも古代の共同体的生活を淵源とする「単一の」公共空間なる概念はこれ以降意味をなさなくなっただろう。しかしその共同体的理想は、オンライン・コミュニティとして部分的には実現されている。より多くの成員が自由に参加して発言できるという理想についても、インターネットがそれに最も近い空間であることは明らかである。それゆえに、公共空間とは「多様性が容認される空間」と考えるべきであろうと指摘しておいた。

電子メディア以前は、人間にとって経験可能な場は常に物理的な身体を基点とした一定の距離内

に限られていた。しかし、電子メディアは空間への意識を変容させ、その結果既存の空間に基づく諸関係、いわば文化の変容までをもたらすことになったのである（Meyrowitz : 1985）。それにともなって「単一の」公共空間という概念はもはや馴染まなくなったのである。こうして、新しいメディアの登場によって既存の制度や文化を相対的に見る視点が醸成されると、ある種の混乱がもたらされる。その典型が既述のとるに足らぬ情報の氾濫であり、そうした混乱を規制しようとする動向が生じることは容易に想像される。しかし、その混乱もまた利用者のコミュニケーション実践の結果なのであり、それがいかに既存の公共性概念の理想からかけ離れていようとも、規制を云々するようなことではないはずである。

註

i　キルケゴールの訳者飯島宗享によれば、キルケゴールの批判は、具体性のない公共概念がいっさいを支配し、個人の首根っこを押さえつける状況にある。幻に過ぎない公共性を僭称して水平化＝個人の抽象化の片棒を担いでいるのがジャーナリズムであると考えていたようである（Kierkegaard, 1846=1975 : 301）。

ii　メイロウィッツによれば、電子メディア登場以降の社会的状況は、物理的な空間を基準にするのではなく、社会的な情報や他の人々の社会的な行為への所与のアクセスのパターン、すなわち「情報システム」（information-system）と考えることができる。この定義は状況論者による定義と矛盾するものではないし、さらに状況の研究が場所と結びついた一場面で生じる相互行為を超えた領域に拡張されるのである（Meyrowitz 1985：37）。

iii　ブルジョア階級が絶対主義王制の公権力との闘争によって、「代表的具現」をみずからの側に奪取する過程の背景には、新聞に代表される出版メディアを利用した言論闘争のほかにも、重商主義以降の資本主義の成立、私人による「文芸的公共圏」等いくつかの要因が存在している。本論はメディア空間の構成という視点から公共空間を論じているため、詳細はHabermas 1990=1994を参照されたい。

iv　ハーバーマスによるセネット批判の論点はこの三層構造を捉えそこなっていることにある。セネットは公的な振舞いとは、自己、自己の直接の歴史、環境、および必要から、ある距離をおいた行動である（Sennett 1974=1991：130-131）と考えた。街や劇場において個人的な感情に拠らないしきたりにのっとった会話がなされたようにである。しかし、これは古典的な市民的公共圏であり、近代のそれが内面性と分かちがたく関係していることを見失っているのである（Habermas 1990=1994 : 31）。

v　このことは、タークルらのCMC研究が強調するアイデンティティの多重化・拡散という経験は、テレビの時代にすでに準備されていた事態の顕在化であることを示唆していよう。

［引用・参考文献］

Anderson, Benedict, 1991, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism,* revised and extended edition.（＝1997、白石隆・白石さや訳『増補　想像の共同体ーナショナリズムの起源と流行』NTT出版

Arendt, Hannah, 1958, *The Human Condition.*（＝1994、志水速雄訳『人間の条件』筑摩書房）

Donath, Judith S., 1998, "Identity and deception in the virtual community", Smith and Kollock eds., *Communities in cyberspace.* Routledge, 29-59.

遠藤薫、2000『電子社会論ー電子的想像力のリアリティと社会変容』実教出版

Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life.*（＝1974 石黒毅訳『行為と演技ー日常生活における自己呈示』誠信書房）

Habermas, Jurgen, 1990, *Strukturwandel der*

Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellshaft.（＝1994、細谷貞雄・山田正行訳『〔第２版〕公共性の構造転換―市民社会の一カテゴリーについての探究』未来社）

花田達朗、1999「パブリックな生活」、東京大学社会情報研究所編『社会情報学II　メディア』東京大学出版会

川浦康至編、2000『現代のエスプリ　日記コミュニケーション』第391号

Kierkegaard, Sören, 1846, *Nutiden.*（＝1975、飯島宗享訳「現代の批判」、松浪信三郎・飯島宗享訳『死にいたる病／現代の批判』白水社）

Meyrowitz, Joshua, 1985, *No Sense of Place: The Impact of Electronic Media on Social Behavior*, Oxford University Press.

Meyrowitz, Joshua, 1990, "Redifining the Situation: Extending Dramaturgy into a Theory of Social Change and Media Effects", Riggins, Stephen Harold ed. *Beyond Goffman,* Mouton de Gruyter, 65-97.

成田康昭、1993「メディア経験とコミュニケーション―パソコン通信ネットにおけるコミュニケーション満足（Ⅱ）」『中京大学社会学部紀要』第８巻第１号

成田康昭、1997『メディア空間文化論―いくつもの私との遭遇』有信堂高文社

西垣通、2001『ＩＴ革命』岩波書店

西垣通編著訳、1997『思想としてのパソコン』NTT出版

Poster, Mark, 1990, *The Mode of Information: Poststructuralism and Social Context.*（＝2001、室井尚・吉岡洋訳『情報様式論』岩波書店）

Sennett, Richard, 1974, *The Fall of Public Man.*（＝1991、北山克彦・高階悟訳『公共性の喪失』晶文社）

桜井哲夫、1994『テレビ　魔法のメディア』筑摩書房

田辺龍、2001「『場』としてのメディア空間―コミュニケーションにおける恣意性と『場』による制御―」『立教大学大学院社会学研究科年報　第８号』、55-66.

筒井淳也・秋吉美都、2001「新しい公共空間への展望―電子ネットワーク空間における公共性の相互行為論的分析―」『社会学評論』第51巻第４号、20-33.

Turkle, Sherry, *Life on the Screen: Identity in the Age of the Internet.*（＝1998、日暮雅通訳『接続された心―インターネット時代のアイデンティティ』早川書房）

吉田純、2000『インターネット空間の社会学―情報ネットワーク社会と公共圏』世界思想社

『現代思想　特集＝インターネット―メディア・コミュニティ』1996年４月号、第24巻第４号、青土社

『広告　ネットワーカー調書』2000年９・10月号、第41巻第５号通巻第343号、博報堂